

令和 6 年 5 月 26 日現在

機関番号：35301

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20K00119

研究課題名（和文）20世紀初頭価値哲学の反自然主義 現代価値論の再考のために

研究課題名（英文）Anti-naturalism of value philosophy in the early twentieth century-For reconsideration of contemporary value theory

研究代表者

九鬼 一人（KUKI, KAZUTO）

岡山商科大学・法学部・教授

研究者番号：30299169

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 800,000円

研究成果の概要（和文）：リッカートの価値哲学を、自然主義的な枠組みに委ねることなく、現代哲学的知見を取り入れて継承する途を探った。とくにその文脈で、価値判断にとって反自然主義的態度決定が不可欠であることを論じた。すなわちリッカートにおける二重作用説を評価し、それに従いつつも、とりあえず前提すべき認知に加わる役割相關的な態度決定を重視した。結論として私は、リッカートの価値实在論とは絶縁し、価値判断の態度決定を解釈行為と見なした。その価値实在論を棄却するなら、スピノザの並行論に接近したとも仮定できるから、彼のスピノザ研究の復元にあたった。当初の計画とは相違して、唯物論のもとでの価値概念の再考を追求した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の意義は、反自然主義的な態度決定的要素を、価値判断に認めたところにある。情動理論を前提にした自然主義的価値論では、価値の知覚を身体媒介的に説く傾向が見られる。それに対し本研究では、価値の知覚説に代えて、新カント学派的な価値の思考説をとるべきであるとした。しかも暫定的認知に加わるべき態度決定を、価値判断にとって必須として、リッカートの二重作用説を継承した。そのさいの態度決定は役割相關的となるから、価値を自然主義的に説明できないと結論した。こうした見地から、自説として唯名論的に価値哲学を展開することで、価値实在論に代わる、唯物論的世界観と整合的な価値哲学の可能性が明らかとなった。

研究成果の概要（英文）：I sought a way to inherit Rickert's value philosophy by adopting the views of contemporary value philosophy, without leaving it to naturalistic frameworks. In this context, I argued that an anti-naturalistic moment of every attitude is indispensable for every value judgment. In other words, I evaluated Rickert's dual operation theory of value judgements, and while following it, I emphasised an attitude - as a complement to the tentative presuppositions-corresponding to the role of each judge. In the end, I isolated myself from his value realism and regarded the taking of an attitude to a value judgment as an act of construing. If I rejected value realism as Rickert's interpretation, I could assume that he had approached to Spinoza's mind-body parallelism. From this perspective, I restored his research on Spinoza's theory which could be seen as substantial materialism. Contrary to my initial plan, I pursued a reconsideration of the concepts of value from a materialist point of view.

研究分野：新カント学派的価値哲学

キーワード：リッカート 二重作用説 プリンツ デルタイ 解釈 唯物論 価値唯名論 スピノザ

1. 研究開始当初の背景

現代価値論は自然主義に与り、その基本的スキームを身体性に委ねてしまう。すなわち価値の身体的感受(信原幸弘等)、身体的評価(プリンツ等)のように受動的認知(これをさしずめ、価値の知覚説と言っておこう)をとるため、反自然主義的でもありうる、能動的な人間観を脅かしかねない。本研究では、新カント学派・現象学・生の哲学がたゞさわる20世紀初頭の価値哲学に、身体的制約を超える能動的要素を見出そうとした。価値にかかわる今日的な研究(情動理論)を活かしながら、実践性・反省性・多元性によってかたどられるリッカートの「しなやかな合理性」(九鬼, 2019)の哲学を中心に、当該時期における反自然主義的価値哲学を考究する、思想史的研究である。

学術的背景 本研究では、しなやかな合理性という、リッカート哲学の可能性の中心を炙り出す。「しなやかな」と言うのは、硬直した合理性の限界を、射程として把握しなおすという趣旨である。

□ 硬直した合理性の限界・・・決断性・可謬性・非完結
□ しなやかな合理性の射程・・・実践性・反省性・多元性

この見地に立てば、リッカート哲学は、世界観望が拠って立つ価値の体系化をつうじ、人間の総体性(とくに能動性)に迫ろうとした哲学と読み解ける。その合理性の哲学について、理論理性の限界である決断性は、実践性との調停を、——(テキストが示唆する)妥当の限界である可謬性は、反省的な修正の余地を、——価値体系の非完結は、個性主義的な多元性を浮き上がらせている。そこで実践性・反省性・多元性に対応して、情動理論である Prinz, Jesse, 2004, *Gut Reactions, A Perceptual Theory of Emotion*, New York: Oxford University Press. と対決しつつ、価値哲学における**認知主義・反省的省察・価値多元主義**という反自然主義的要素に着目しようとした。

2. 研究の目的

2015年度からの科研費で、リッカートの義務論的認識論は、論理的に決断主義に晒されていることを明らかにした。ラスクの批判を考慮しつつ、決断的な**非認知主義**を克服した**認知主義**を描き出す目的を立てた。これは同時に情動理論に顕著な、価値の反省性を批判するという目的もあった(例えば情動理論によれば、檻の中の大蛇に恐怖を感じるものの、思考説に立って、安全であるという省察的価値判断を優先すべきこと)。そのために、価値の知覚説(この範疇には現象学的価値論の一部も属する)に対して、価値の思考説を打ち出そうとした。

これまでのリッカート研究で、主観的普遍と客観的価値という二極を、ともに価値判断の根拠として立てると、どちらが認識論的に試金石となるのか不分明となることを痛感していた。そこで有限主観の能動的態度決定をクローズアップするかたちで価値措定が、個性主義と手を結びあうという、『判断力批判』にわたる論点を、ディルタイを手引きにしつつ、リッカートに読みこもうとした。解釈学的な見地を最大限とり入れ、**身体性**とはちがう文脈で、**反省的省察**の可能性を探る、という目的を立てた。

反省的省察で効いてくるのは、個体概念の構成原理たる包括的価値の先行的理解である。リッカートの「価値の体系」で登場する——諸多元的価値が、まずもって理解[verstehen]され、そののちに意味が解釈[deuten]される。この上層的な解釈によって、生の多元的な「解釈」が保証されるであろう。こうして**物理主義**と袂を分かち、現象学と一脈をつうじる、**価値多元主義**に立脚することを論じようとした。

3. 研究の方法

認知主義 九鬼, 2018, 科学哲学会発表で示したように、価値判断における技巧性・情動機能に対する認知機能の重視を、現代哲学を織りこんで論じることにした。とくに2020年12月『岡山商大論叢』に「しなやかな合理性から認知主義へ」を公表。プリンツ等、現代価値論との対比において、リッカートの認知主義を称揚した。認知主義を取るヌスバウム・ソロモン等を借りて、理性が「ここで、[心の]動きとなり、抱懐し、拒絶するのである。それは迅速にせよゆっくりにせよ、また確然としてにせよ、躊躇いがちであるにせよ、[心の]動きとなる」(Nussbaum, Martha, 2018 (←2004), “Emotions as Judgements of Value and Importance”, in; eds. by Aaron Ben-Ze’ev and Angelika Krebs, *Philosophy of Emotion. Vol. I. The Nature of Emotions*, London/New York: Routledge, pp.77-92. p.87.) ことに沿った価値論を描き出した。しかし認知の上層に(再)較正(Dretske, Fred, 1986, “Misrepresentation“, in: Radu J. Bogdan, *Belief: Form, content and function*, Oxford:Oxford University Press, pp.17-36.) という、解釈主義的な能動的要素を盛りこむべきことに、研究途中で気づき、受動的認知主義を斥ける仕儀となった。

反省的価値 2021年3月『岡山商大論叢』に「反省的価値の体系」を公表。リッカート認識論における可謬性・宗教性・反省性を論じ、新カント学派の生存[Dasein]におけるコンティンゲンツの問題を扱った。典拠としたのは Orth, Ernst Wolfgang, 1998, “Leben und Erlebnis bei Heinrich Rickert. Zur Frage der Kontingenz im Neukantianismus”, in; hrsg. von Krijnen, Ch. & Orth, E.W. *Sinn, Geltung, Wert, Neukantianische Motive in der modernen Kulturphilosophie, Studien und Materialien zum Neukantianismus*, Würzburg: Königshausen & Neumann, S.75-91.の論文である。そして『判断力批判』を含むカント哲学体系を意識しつつ、価値の生動性から、ディルタイと通底する側面を明らかにした。この問題は、今後、三木清の歴史哲学研究の文脈で発展させる心算である。

また身体性に対する反省性・省察性という問題意識は、「非帰結主義的／帰結主義的に色づけされていない二重過程理論」(2020年8月23日カント研究会発表)、「20世紀初頭価値論が残したもの・その歴史的な限界と射程」(2022年4月10日九鬼科研費シンポジウム、植村玄輝氏・上島洋一郎氏との鼎談)にも受け継がれている。

価値多元主義 物理主義と距離を置く方向で、この目的は遂行された。すなわち意図記述に対応した「反自然主義的な」態度決定を前提となる、——暫定的認知の上層に設定される——「解釈」に注目した(先に述べた「再較正」の議論が端緒になった)。また上記カント研究会発表では、アマルティア・センを下敷きにして、暫定的認知が「解釈」の反照的均衡に巻きこまれてゆくことを、非帰結主義的に打ち出した(research mapに原稿はアップロードしてある)。リッカートは、フッサールともども生の解釈[Deutung]を掲げ、総体的な人間価値(論文「反省的価値の体系」参照)を論じたわけであるが、それが解釈中心の行為記述論と関係をもつことに注目し、役割相関的な態度決定に力点を置いた。

とくに2021年11月『ディルタイ研究』掲載の「ディルタイの解釈学的価値論——いかにして解釈学の妥当性傾向は解きほぐされるのか——」では、価値判断における役割相関的な態度決定を描きだした。ディルタイは、価値判断がどうして客観的妥当性をもちうるのか、問うたが(vgl. Dilthey, Wilhelm, 2004, *Logik und Wert, Späte Vorlesungen, Entwürfe und Fragmente zur Strukturpsychologie, Logik und Wertlehre (ca. 1904-1911)*, in; Wilhelm Dilthey: *Gesammelte Schriften*, Stuttgart: B. G. Teubner/Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, Bd. XXIV.

“Entwürfe und Fragmente zur Theorie der Wertschätzung und Wertsystematik “ (ca. 1905-1911) , S.213-265, S.228.)、妥当性の問題は、〈解釈学的価値論と言うべきもの〉につきまとう難問である。この見通しのもとに、価値の妥当性をめぐる問題に焦点を結び、それを解きほぐそうとした。一方でこうした妥当性の要求とともに、以下の価値多元性の具体例が示す、妥当性の限界も見逃しえない。

例えば、火事場における消防士の父は、「保護者としては我が子を救助すべきである」一方、「消防士としては我が子を見殺しにしても、大勢の人を救うべきである」というジレンマに遭遇する。ただし、価値判断が恣意的に浮動するわけではなく、同一役割において共通の規範が妥当する。なお上記シンポジウムでは、参加者との間で役割相関性に関する活発な意見交換がなされた。——こうした役割相関性を論じるためには、暫定的に前提される認知に態度決定が加わると見なすべきである。役割に応じた価値多元性を保証するため、認知主義からの撤退というパラダイムチェンジに踏みこんだ。

4. 研究成果

以下ではこの科研費補助授業でえた成果を、①リッカート哲学の歴史的 position づけ ②リッカート的な認知主義に対する否定的評価 ③唯物論に立脚した価値哲学のパラダイムチェンジ (1) 価値哲学の言議論的転回の必要性 (2) リッカート哲学のスピノザ的並行論との接近 という見地から総括する。

まず①に関連して、2022年5月『東洋学術研究』Vol.61, No.1に「リッカート哲学の臨界」と題する、価値哲学の歴史的 position づけに関する小論が掲載された。カント哲学を継ぎつつ、19世紀において〔ロツェにさえ顕著な〕現象主義が力をもった (ref.サンタヤナ)。すなわちカントの垂流として、価値対象の認知説が流布したのである。他方、ドイツ観念論のヘーゲルへの移行行きが示すように、認知説は構成主義的態度説に蟬脱してゆく。これら両者のアポリア (態度決定の必要性・決断の恣意性) を回避するかたちで、客観的物自体に外在しつつ、共同体的に構成される意識に対しては内在する、〔リッカートの〕超越論的当為を、フィヒテ的に理解すべきであることを論じた。これは、②の認知主義の乗り越え (リッカートの価値判断論の二重作用説を改訂) に対する、哲学史的露払いとなった。

次に②に関連して、リッカートの価値哲学を批判する過程で、〔もとはと言えばリッカート由来の〕二重作用説を認知主義の代替案として称揚した。2023年9月刊行の、科学研究費最終報告書「20世紀初頭価値哲学の反自然主義——現代価値論の再考のために」において、今にいたる九鬼のリッカート研究について、その推転の概略を記述した。すなわち、イ) 九鬼の〔自著『新カント学派の価値哲学』を出版したときの、一番〕最初のリッカート解釈＝価値形而上学的解釈 (観念論と価値実在論)、ロ) 前科研費でとった価値決断主義的解釈、ハ) 今回の科研費研究の当初の目処、つまり価値認知主義的解釈、二) それを乗り越えるべく考案した、自説としての価値記述論＝二重作用説 (この場合、唯物論と価値唯名論となる) の四段階の推転として、総括した。

とくに認知主義の乗り越えを、自説として展開すべく、2022年12月『岡山商大論叢』に「二重作用としての価値判断」を発表した。価値を知覚説で論じる 1. 身体反応説、2. 現象学理論は、価値判断論の思考説によって乗り越えられるとして、新カント学派の価値判断論を評価した。価値判断論のタイプには、大きく分けて、認知タイプと態度タイプがあるが、両者の中間形態である、暫定的認知の上階に (役割相関的な) 態度決定的解釈を据える二重作用説に注目すべきであるとした。

役割的相関性が効いてくるストーリーとして、以下のような物語文が挙げられる。それは「記述」の一貫性を保つかたちで、遡言的に変更されてゆく。――4/1に侵略戦争に加担して、海外出兵する港に出発したとせよ。この出来事をeとする。その【侵略者役割としての】「侵略への加担するための出発」という「記述」を $F_1(e)$ とする。しかるに、4/2に価値観の一大転換がおこり、反戦的な価値判断を下したとしよう。もはや、戦争に行くまいと決心し、実際4/10に、敵地に赴くはずの波止場で、反戦運動に参加したなら、侵略行為への出発 $F_1(e)$ は、【反戦主義者役割としての】「反戦運動の目的地への出発」という「記述」 $F_2(e)$ に変わってしまっている。つまり自然的特性とは独立な、「記述」の遡言的変更がありうる。こうして役割的態度決定の変更に応じた、事後的な価値判断によって、「記述」は書き換えられる。「役割Xとして」為される価値判断は、時間を遡るかたちで、行為理解のネットワークを編み直されてゆくのである。この役割相関性を組みこんだ二重作用説は、価値哲学を展開するにさいして、遠近法主義的な理路であると考えた。

最後に③(1)として、九鬼科研費シンポジウムで、二重作用説をとるなら、価値判断は畢竟、言語的記述として考えるべきであって、価値実在論は棄却されるべきである論じた。その文脈で、カウルバッハ的な遠近法主義(Kaulbach, Christian Friedrich, 1990, *Philosophie des Perspektivismus*, Tübingen: J. C. B. Mohr.)の二重性に重ね合わせた。さらにカント的な観念論を迂回して、二重性を存在の説明/価値の理解に割りふることで、唯物論的な価値論に、方向転換すべきとした。これに続く研究として、役割相関性に由来する価値判断のジレンマにおいて、逡巡する苦悩のなかに、合理性を見出す途があると考えている。とはいえ価値判断が恣意的に浮動するわけではない。むしろ同一役割において共通の規範が妥当すると見るべきであろう。

さらにリッカート研究として、③(2)として、彼の〔認識論的〕並行論へのコミットメントを、スピノザに引き付けて「神即自然」[*deus sive natura*]＝一元論的唯物論(一元的なものを神と呼んでも、自然と呼んでも同じなら、実質的な唯物論)図式で解釈する可能性を、研究終盤で思いついた。もしそうなら彼にも、スピノザ的な一元論的思考を見出すことが可能かもしれない。このような唯物論的価値論を展開するための前提作業として、ハイデルベルク図書館からダウンロードした「ヴィンデルバントのスピノザ講義口述筆記録」Hed. Hs. 2740IIA-12(九鬼は執筆時、当該文書をリッカートによるゼミレポートと誤解していた。その誤りを2024年発表資料で訂正した)を翻訳して、2021年9月『スピノザーナ』に「真理の宛て先――新カント学派とスピノザ」を発表した。ここでは、物心並行論の枠組みで現実と価値の関係を考えた。スピノザの $A \Rightarrow \Box A$ に対して、新カント学派の $ObA \Rightarrow \Diamond A$ 、 $\Box A \Rightarrow ObA$ という様相論を導きにして、存在論的相関性・現象主義との関連での、新カント学派とスピノザの接点を浮き上がらせた。

この現実と価値の並行論は、スピノザ研究と関係させて、説明と理解論争として展開する予定である。具体的には、ハイデルベルク大学図書館に赴き(2022年8月6日～14日)複写した、スピノザ講義原稿Hid. Hs. 2740II C-22.129-153.を翻訳し、2024年3月『岡山商大論叢』に「資料:リッカートのスピノザ講義原稿抄訳(付・ヴィンデルバントのスピノザ講義口述筆記録要約)」を発表した。この資料をベースに、可能なら二年後を目途にして、リッカート=スピノザ関係の論文を公にする予定である(他研究者とともに公刊する話もあったが、現在うまく連絡が取れていない。が、なんらかのかたちで公刊できるよう努力したい)。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 4件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 5件）

| | |
|--|----------------------|
| 1. 著者名 九鬼一人 | 4. 巻 第59巻第3号 |
| 2. 論文標題 資料：リッカートのスピノザ講義原稿抄訳（付・ヴィンデルバントのスピノザ講義口述筆記録要約） | 5. 発行年 2024年 |
| 3. 雑誌名 岡山商大論叢 | 6. 最初と最後の頁 81-102 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 - |

| | |
|---------------------------------------|--------------------|
| 1. 著者名 九鬼一人 | 4. 巻 第58巻第2号 |
| 2. 論文標題 二重作用としての価値判断 | 5. 発行年 2022年 |
| 3. 雑誌名 岡山商大論叢 | 6. 最初と最後の頁 1-23 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 - |

| | |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名 九鬼一人 | 4. 巻 Vol.61 No.1 |
| 2. 論文標題 リッカート哲学の臨界 | 5. 発行年 2022年 |
| 3. 雑誌名 東洋学術研究 | 6. 最初と最後の頁 304-324 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|---|---------------------|
| 1. 著者名 九鬼一人 | 4. 巻 32 |
| 2. 論文標題 デイルタイの解釈学的価値論 いかにして解釈学の妥当性志向は解きほぐされるのか | 5. 発行年 2021年 |
| 3. 雑誌名 デイルタイ研究（日本デイルタイ協会） | 6. 最初と最後の頁 71-88 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 - |

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 九鬼一人 | 4. 巻 17 |
| 2. 論文標題 真理の宛て先 新カント学派とスピノザ | 5. 発行年 2021年 |
| 3. 雑誌名 スピノザ ナ(スピノザ協会年報) | 6. 最初と最後の頁 19-34 |
| 掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|---------------------------------------|---------------------|
| 1. 著者名 九鬼一人 | 4. 巻 56巻第3号 |
| 2. 論文標題 反省的価値の体系 | 5. 発行年 2021年 |
| 3. 雑誌名 岡山商大論叢 | 6. 最初と最後の頁 21-42 |
| 掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である) | 国際共著 - |

| | |
|---------------------------------------|---------------------|
| 1. 著者名 九鬼一人 | 4. 巻 56巻第2号 |
| 2. 論文標題 しなやかな合理性から認知主義へ | 5. 発行年 2020年 |
| 3. 雑誌名 岡山商大論叢 | 6. 最初と最後の頁 23-42 |
| 掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である) | 国際共著 - |

[学会発表] 計4件(うち招待講演 1件/うち国際学会 0件)

| |
|--|
| 1. 発表者名 九鬼一人 |
| 2. 発表標題 リッカート哲学の歴史的限界 価値存在・価値認識・ジレンマ |
| 3. 学会等名 九鬼一人研究代表・「20世紀初頭価値論が残したもの・その歴史的な限界と射程」科研費シンポ(Zoomで発表) |
| 4. 発表年 2022年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 九鬼一人 |
| 2. 発表標題 リッカート哲学の臨界 |
| 3. 学会等名 伊藤貴雄研究代表・「近代日本における新カント派受容の歴史と意義」科研費研究会（Zoomで発表）（招待講演） |
| 4. 発表年 2021年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 九鬼一人 |
| 2. 発表標題 ディルタイの解釈学的価値論 |
| 3. 学会等名 日本ディルタイ対協会関西研究大会報告 (Zoomで発表) |
| 4. 発表年 2021年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 九鬼一人 |
| 2. 発表標題 非帰結主義的 / 帰結主義的に色づけされていない二重過程理論 非帰結主義的 / 帰結主義的に色づけされていない二重過程理論 |
| 3. 学会等名 カント研究会 (Zoomで発表) |
| 4. 発表年 2020年 |

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

| |
|--|
| <p>関係HP・URL 岡山商科大学機関リポジトリ URL https://oka-shodai.repo.nii.ac.jp/?page=1&size=20&sort=controlnumber ディルタイ研究J-stage URL https://www.jstage.jst.go.jp/browse/diltheygsj/-char/ja/researchmap URL https://researchmap.jp/read0052963/</p> |
|--|

6. 研究組織

| | 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|-------|---|------------------------|----|
| 研究協力者 | 植村 玄輝 (UEMURA Genki) (40727864) | 岡山大学・学術研究院社会文化科学学域・准教授 | |
| 研究協力者 | 上島 洋一郎 (UESHIMA Yoiciro) | 関西大学・非常勤講師 | |
| 研究協力者 | 近堂 秀 (KONDO Shu) | 法政大学・兼任講師 | |
| 研究協力者 | 高木 駿 (TAKAGI Shun) (90843863) | 北九州市立大学・基盤教育センター・准教授 | |
| 研究協力者 | 入江 祐加 (IRIE Yuka) | 香川大学・非常勤講師 | |

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|
| | |